

柴山知也（横浜国立大学教授）

この 20 年ほどの間に日本の大学で博士や修士の学位を取得し、それぞれの母国を基盤にして国際的な活躍をしている研究者の数が増加している。私の専門とする土木工学の分野だけでも、既に 400 人を超えている。日本留学経験者の増加は、多数の途上国における基幹的人材の育成を促進しただけでなく、日本の大学を中核とした恒常的な研究者ネットワークの形成にも寄与した。私は、本年 1 月から 2 月にかけて、昨年 12 月 26 日に発生したスマトラ沖地震の津波調査を行ったが、この調査においても元留学生ネットワークがきわめて有効に機能した。調査チームの一員であるスリランカ南部・ルフナ大学のニマル・ウィジャヤラトナ上級講師とインドネシア・アチェのシアクアラ大学のマシミン講師は、ともに筆者の研究室の元留学生である。調査の全過程に現地研究者が参加することにより、当事者の視点からの被災時の状況把握に基づいた貴重なデータを収集することができた。

当事者の視点から調査を進めた結果、津波の高さで一概に被害が決まるわけではなく、自然的・社会的な条件から被害の発現の仕方が多様であることがわかった。例えば、スリランカ南部のハンバントータでの津波痕跡高は 10.6m であったが、ポルヘナの海岸はさんご礁に守られていたため津波高は低かった。それ故、家屋は残っていたものの、屋内で溺死した人が多かった。また、インドネシアのアチェ市内では、津波被害が平面的に内陸部に広がっており、西部のレプングでは、海岸から 800m にわたって泥の荒野が広がっていた。隣のリティングでは、半島の丘の上を津波が乗り越えており、津波痕跡高は 48.9m と今回の津波での最大の痕跡高を計測した。

今後は、日本留学経験を持つ現地研究者が調査を続け、それぞれの地域にあった防災対策を立てていく予定である。彼らを継続的に支援していくのが日本の役割である。